

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』
第1部 第1章 第2, 3節

岡 村 眞紀子
岡 田 典 之
川 島 伸 博 訳

第2節
第1項
解剖についての脱線。

このまま進めて「憂鬱症」という病気がどんな病気であるのかを定義し、さらに進めてそれを論じていく前に、後の議論をよりよく理解してもらうためにも、少し脱線して身体の解剖と魂の機能とについて語ることは、場違いなことではないと思う。というのも今後、難解な単語がしばしば出てくるからである。たとえば「下腹部」、「下肋部」、「痔疾」等。「想像力」、「理性」、「気質」、「精気」、「生命の」、「生来の」、「動物性の」、「神経」、「静脈」、「動脈」、「乳糜」、「粘液」といった、それが何を意味するのか、どこにあるのか、またどういう目的をはたしているのか、俗人には容易に把握できないような単語がたくさん出てくるのである。またさらに、この脱線は、ある種の人達、時間と暇とが十分あって、取引の仕方、売買、美しい鷹や猟犬や馬を選んで飼育するといった世俗の事柄について十分知悉している人達にとっては、いい機会になるかもしれない。つまり、この極めて重要な主題について、より正確に調査し、さらに深く調べ、またそれについて、あの王族の預言者と共に神を称える機会に（「というのも、人間は畏れ多くも、驚異的に造られ、巧みに創られているからだ」）。彼らは自分自身についての知識に関しては、完全に無知で無頓着、この肉体と魂とが何であるかを知らず、それらがどのように結びついているか、どのような部分、機能から構成されているかを知らず、人間と犬の違いさえわからない。また（メラニトンがうまく批判しているように）「特に肉体の知識は健康の維持と身の処し方についての事柄とに大いに関わってくるのだから、人間が自分自身の肉体の構造や構成について知らないことほど不名誉で」卑しむべきことはない。それゆえ、人間を刺激してこの研究に向かわしめ、ガレノス、パウヒヌス、プラター、ヴェサリウス、ファロピオ、デュ・ローラン、レメリンなどラテン語で大量

に書かれた精緻な作品、またコロンボの著作の翻訳『ミクロコスモグラフィア』13巻のようなわが国の勤勉な人達が最近母国語で書いた作品を概観するため、ここに簡単な脱線をすることにした。またヴェッカー、メランヒトン、フェルネル、フックス、その他、魂についての退屈な論考の数々は（この主題をより簡潔に扱い、書き記しているのだが）いつでも簡単に手に入るというわけではないので、ここに要約を示すが、味見程度に全体像をかじってもらう程度にしたい。

第2項

身体の分類。体液、精気。

身体の部分については数多くの分類法があるが、広く受け入れられているのは、デュ・ローランとヒポクラテスによるもの、つまり、「内包される部分」と「内包する部分」とに分ける分類法である。そして「内包されるもの」には、「体液」と「精気」とがある。

体液は体内の液状あるいは流動的部分であり、身体を維持するため、身体に包括されている。これには先天的、つまり我々が生まれたときからあるものもあれば、獲得されるもの、すなわち後天的なものもある。根本的、先天的体液は、滋養によって日々供給されるが、これを「カンビウム」と呼び、その維持のために「ロス」や「グルテン」といった副次的体液があるとする者もいる。後天的体液は、四つの主要体液を維持するために、まず肝臓で調合されて体を経巡り、こうすることで「乳糜」が除外される。また体液を有益なものと同様のものとに分け、「粘液」と「血液」は有益なもの、他の二つは糞便的なものとする人達もいるが、クラトはヒポクラテスを典拠に、四原液はどれも排泄物ではなく、それなくしては生命体を維持できない液体だと考えている。これら四つの体液は、血液全体の中にも含まれているにも拘わらず、個別の性向があるので互いに識別でき、メランヒトンの言う後天的に獲得される「病原的体液」あるいは「病的体液」とも区別される。

「血液」は、熱くて甘い中庸の赤い体液であり、「腸間膜静脈」で準備され、肝臓の「乳糜」の最も中庸な部分から形成される。その役割は、静脈を通して身体のあるあらゆる部分にいきわたり、体全体に滋養を与え、その力の源となり、紅潮させることにある。そしてまず心臓でこの血液から「精気」が生まれ、「動脈」を通して他の部分にも伝えられていく。

「粘液」は冷たく湿った体液であり、肝臓で「乳糜」（すなわち胃で消化される食物から生じる白い液体）の冷たい部分から形成される。その役割は、舌のように動かされる器官が乾きすぎないように滋養を与えて湿らせることにある。

「黄胆汁」は熱く乾燥していて苦い体液で、「乳糜」の熱い部分から形成され、胆嚢に集められ

る。この体液は生来の熱と感覚を維持し、糞便を排出する役割を担っている。

「黒胆汁」は冷たく乾燥し、濃厚で酸っぱく黒い体液で、滋養物の不潔な部分から形成され、脾臓から分泌される。その役割は他の二つの熱性体液、すなわち「血液」と「黄胆汁」の動きを抑え、それらを血の中に保持して制御し、骨に滋養を与えることである。これら四つの体液は、四元素、さらに人間における四時代に対応している。

こういった体液に対して、尿の材料となる「漿液」、さらに第三の調合による糞便的体液の汗と涙とを付け足すこともできる。

「精気」は「血液」から発散される極めて微細な蒸気であり、魂の道具であって、その行動をすべて遂行する。また身体と魂とを結ぶ絆、あるいは「媒体」であると主張する人達もいる。あるいはパラケルススによれば、四番目の魂それ自体とされる。メラニヒトンによると、精気の源泉は「心臓」にあり、そこで形成され、その後、脳へと運ばれて、そこで新しい性質を帯びるといふ。精気には身体の主要な三器官である「肝臓」、「心臓」、「脳」に応じて三種類、すなわち「自然精気」、「生命精気」、「動物精気」があるとされる。「自然精気」は「肝臓」で形成され、そこから静脈を通して拡散し、各器官固有の働きを遂行する。「生命精気」は心臓の中で「自然精気」から形成され、動脈を通して体の各部分に運ばれる。これら二つの精気が止まってしまうと、生命もまるで「失神」状態の場合のように、生命活動が止まってしまう。「生命精気」から形成され、脳へと上がっていき、神経を通して体の下位の各器官に拡散する「動物精気」は、こういった器官すべてに感覚と動きとを与える。

第3項 同質の部分。

内包する部分は、比較的硬い実体であり、アリストテレスは『動物誌』1巻1章で、「均一質」か「不均一質」か、すなわち「同質」か、「非同質」かに分類している。デュ・ローランの1巻20章でも同様である。「同一質」のものは、分けたとしても、依然として同質であるもので、水をいくら分割しても水になるようなものである。同質部分には「精子的なもの」と「肉に関わるもの」がある。「精子的なもの」とは種子から直接生じるもので、「骨」、「軟骨」、「韌帯」、「膜」、「神経」、「動脈」、「静脈」、「皮膚」、「筋繊維」、「腱」、「脂肪」である。

「骨」は乾燥して硬い。種子の最も密な部分から派生するもので身体の他の部分を強化し支える。人間の身体には304あるとも、307だとも、また313だとも言われる。骨には神経がなく、それ故感覚もない。

「軟骨」は、骨より軟らかく、他のものよりは硬い実体で、弾力性があるため運動に関わる部分を支える。

「靭帯」は、骨と骨とを、また他の部分と骨とを結合するもので、腱がその下働き役を担っている。そして「膜」の役目は残りの部分を覆うことである。

「神経」は、外を膜で覆われ、内は髄で詰まっています。脳から出て、感覚と運動のために動物精気を運ぶ。神経には硬いものもあり、軟らかいものもある。軟らかい方は感覚を司り、七対ある。第一対は視覚のための視神経、第二対は眼球を動かす神経、第三対は舌の味覚神経、第四対は口蓋の味覚神経、第五対は耳の聴覚神経、第六対は最も広範囲で全体内を走り、第七対は舌を動かす神経である。硬い方の神経は内臓を司る。背骨の脊髄から出て、三十もの結合部があって、頸椎では七つ、胸椎では十二等々である。

「動脈」は長く中空で、二重の血管壁からなり、生命精気を運ぶ。それをさらに明らかにするため、解剖医ヴェーゼルは生きのまま人間を切開するのを常としたという。動脈は心臓の左半分から出て、基本的に二本あり、そこから他の血管が分岐する。すなわち「大動脈」と「静脈」とがあり、大動脈からはすべての動脈が出、全身に行きわたる。静脈は肺に行き、空気を取り込んで心臓を冷却する。

「静脈」はパイプのごとく中空で円形である。肝臓から出て、血液と自然精気を運び、全身にもたらず。静脈には「門脈」と「大静脈」があり、すべての静脈は大静脈に合流する。「門脈」は肝臓の窪みから来て、腸間膜からの静脈と繋がり、それを通して「乳糜」を胃と腸から摂取し、肝臓へと運ぶ。大静脈は肝臓から血液を受け取り、身体中を巡る血管へと繋がる。「門脈」から派生する血管には「腸間膜に向かうもの」と「肛門に向かうもの」とがある。また「大静脈」の支流は「外向きのもの」と「内向きのもの」、すなわち「血液生成に関わるもの」と「腎臓での排出に関わるもの」がある。「外向きのもの」は頭、腕、足などに流れるもので、それぞれ名称がある。

「筋繊維」は白く硬い筋で、全身にわたって存在する。真っ直ぐ伸びるもの、斜めに走るもの、交差するものと多様で、それぞれの用途がある。「脂肪」は血液のない湿潤性の均一質のもので、血液中の最も濃厚な油性の物質からできている。皮膚は身体他の部分を覆い、表皮とその下の「小皮」から成る。「肉」は軟らかく赤っぽい色をしていて、血液等々の固体化したものから成る。

第4項 非同質の部分。

また「非同質の部分」は、いわゆる「器機的」、「道具的」なもので、それには「内部的」なもの、「外部的」なものがある。外部的なもので主なものは、前面のものと背面のものに分けられる。まず「前面のもの」としては、頭頂部、前頭部、頭蓋、顔面、額、こめかみ、顎、眼、耳、鼻など、首、胸部、上下腹、下肋部、臍、鼠径、大腿など。「背面のもの」としては後頭部、背中、肩、脇腹、腰、腰骨、仙骨、臀部など。また関節、腕、手、足、脚、腿、膝など、前面、背面双方に関わるものがある。これらについては、すぐ分かり良く知られている故に、私は軽く触れておいたが、それもとりわけより重大なものだけである。その他のものに関しては、知りたいと思う者は、魂についての諸書にあたるべし。

「内部の器機的な」部分は目に見えず、その数もいろいろに言われる。また様々な名称、機能を持ち、さらに分類されることもある。デュ・ローランの「貴なる」と「貴ならざる」ものの分類が最も著名で注目に値する。貴なる部分には三つの主たる部分があり、他の部分はそれらに属し、そのために働く。すなわち「脳」、「心臓」、「肝臓」である。それらの位置によって全身は三つの部分に分けられる。まず「頭部」で、ここに動物的器官が存し、脳それ自体は、神経によって感覚や運動を他の部分に伝える（いわば）枢密顧問官のようなもので、「心臓」に対する大法官ともいべきものである。二つ目の部分は胸、あるいは「胴」中央部でそこには心臓が王のごとくその宮廷を守っている。そして動脈により生命を全身に伝える。三つ目の部分は「胴」の下部で、そこには肝臓がローマ教皇全権大使然として存在し、他の生来の器官とともに、消化液の混合、滋養を司り、排泄を助ける。胴の下部は「横隔膜」で上部と分けられ、何人かの医者によれば、さらに三つの腔、すなわち上、中、下の三部に分かれる。上部下肋部の右側に「肝臓」、左側には「脾臓」がある。ここから「下肋部憂鬱症」が命名される。二つ目の臍、脇腹は「腹膜」で先の部分と隔てられる。最後は水分の行路、ここはまた三つに分けられる。アラブ人はこの領域を「上腹部」と「下腹部」の二部に分けた。「上腹部」を彼らは「ミラク」と呼び、ミラクアリス・メラニコリア上腹部憂鬱症なる語はこれに由来し、アラブ人達もこの語をときどき使っている。これらの部位それぞれについて私は個別に手短かに扱おう。まず三番目の領域について扱うが、それは自然的機能を果たす器官のある場所である。

しかし、読者諸氏、(メラニヒトンが言うように)「何か聖なる寺院か王の宮殿に連れてこられたと考えていただきたい。それは材質を見るためのみならず、我らが偉大なる創造主の類稀な技とその出来映え、意匠を見るためである。これを正しく考えるなら、心楽しく有益な考察となろう」。今考察し吟味しているこの「部分」の部位は「滋養」と「生殖」の働きをするものである。「滋養」の部分は、最初と二番目の調合に与る。すなわち食べたものや飲んだものを「胃」に送

り込む「食道」である。腹の中央、「横隔膜」の下に位置する「空洞」たる胃は最初の調合の（いわば）台所で、食物を「乳糜」にする。「胃」には上下二つの口がある。上の口は、ときには胃本体と考えられ、下の（ヴェッカーが言う）扉は「幽門」と名づけられている。この胃は「大網膜」で支えられているが、これを「腹膜」と呼ぶ者もいる。「胃」から「肛門」に至るまでの間に「腸」があり、「乳糜」を少し変え、送り出すことに少しばかり与り、糞便として外に送り出す。腸は、その位置と実体、細いか太いかで、小腸と大腸とに分けられる。細い方は小腸で、まず「十二指腸」は胃から続く部分で、およそ十二インチの長さ（とフックスは言う）。そこに繋がる「空腸」には「腸間膜静脈」があり「乳糜」を腸から肝臓へと運ぶ。三番目は「回腸」。多くの皺があって、その皺で、「十二指腸」と共に「胃」から送られてきた「乳糜」を受け取り、保ち、送り出していく。大腸には三つの部分、「盲腸」、「結腸」、「直腸」がある。「盲腸」は太く短い腸で、一つだけ口があり、その口の部分で「回腸」と「結腸」とが出会う。ここで糞便を受け取り、「結腸」へと運ぶ。「結腸」は、糞便が速く移動し通り過ぎないように、曲がりくねっている。「直腸」はまっすぐで、糞便を「肛門」に運ぶ。「肛門」の口は「括約筋」と呼ばれる「筋肉」で閉じられていて、人が便器に向かおうという気になるときまで、糞便をうまく保持するようになっている。これら腸の間に位置するのが「腸間膜」で、静脈、動脈、それに多くの脂肪からなり、主として腸を支えている。これら食道から腸までの全ての部分が消化液調合の最初を担う。二番目の調合には、良き栄養分を生成し、悪しき部分を取り除く働きがあり、それは主として肝臓に属する。肝臓は凝固した血液に似た色の血液製造工場で、右「下肋骨」に位置し、半月形をしている。メラニトンは「高貴な部位」と称している。肝臓は「乳糜」を血液に変え、全身の滋養に供する。排泄されるものには「胆汁性」のもの「水様性」のものがあり、後者は別の部分によって運ばれる。「肝臓」の窪みに位置する「胆嚢」は「黄胆汁」を抽出し、「脾臓」は「黒胆汁」を抽出する。「脾臓」は「肝臓」の反対側、左側にあり、海綿質で、未知の働きによってこの黒胆汁を取り込み、それにより養われる。余剰は胃底部に運ばれて、食欲増進の役割を果たしたり、また糞尿として腸に送り込まれる。水様性のは、二つの腎臓が腎血管と「尿管」とを通じて排出する。腎血管はこの余分な水分を血管から吸収し、それを二本の「尿管」が「膀胱」に運ぶ。「膀胱」は下腹部という位置故に尿を受け取りやすく、口の部分と底の部分からなる。底の部分は尿を溜め、口の部分は筋肉で収縮して締め、門番として、尿が我々の意思に反して流れ出ることを防ぐ。

生殖に関わる部位では、両性に共通のものと、どちらかの性に特有のものがある。これらは私の目的からはずれるので、あえて省略することとする。

次に述べるのは体の「中央部」すなわち胸部で、生命に関わる機能と部位を含み、（先に述べたように）「横隔膜」によって腹部と分けられる。横隔膜は多くの神経繊維を含む膜で、様々な用途のなかに笑うための道具としての機能がある。また横隔膜とは別に、多くの神経を含む薄い

膜があり、胸部を全て内包する。「胸膜」と呼ばれ、炎症を起こすと「胸膜炎」という病気の起こる場所である。第三の膜があると言う者もいて、それは「縦隔膜」と呼ばれ、胸部を左右二つの部分に分けている。この胸部において主たる部分は「心臓」であり、生命、熱、精気、脈動、呼吸の源のある場所である。我らの身体の太陽であり、唯一の指揮官、王である。そしてまた、あらゆる感情、情念の起こる場所であり、器官である。全ての生き物において「心臓は最初に生まれ、最後に死ぬ」。錐体形をしていて松毬に似ていなくもない。この器官がこれほど多様な感情を表出し得るとは驚嘆に値する。感情の変化で心臓は拡張もしくは収縮し、身体を巡る体液を動かしたり制したりもする。悲しみのときには黒胆汁を、怒りのときには胆汁を出す、また、血液を喜びにおいては外に出し、悲しみにおいては内に取り込む。ちょうど馬が馬車を動かすように、「心臓」は体液を動かすのである。この「心臓」は単一体の部位であるが、「左室」「右室」の二つの腔室に分かれる。「右室」は半月過ぎの月のような形で他方より大きく、「大静脈」から血液を受け取り、そのうち幾分かを栄養分として「肺」に送り、残りを左側に送って精気を生ぜしめる。「左の部分」は「円錐形」で生命を司る。松明が油を吸い上げるように、血液を吸い上げ、そこから精気と火を生み出す。そして血液における精気は松明における火のようなもので、「左の部分」は「大動脈」と呼ばれる太い「動脈」を通じて全身に精気を送る。また、「静脈」と呼ばれる「動脈」を通じて肺から空気を取り込む。心臓の左右はそれぞれ血管を有する。右は二本の静脈、左は二本の動脈。これら以外に二つ、両方共通の湾曲した心耳があって、左右両方に働く。その一つは血液を溜め、もう一つは空気を溜めて様々な用途に供する。「肺」は牡牛の蹄に似た細長い海綿状の部位で、(フェルネルによれば)町の官吏、すなわちお触れ役、また(ある者によれば)王の弁士のごとく、声での仲介係などと呼ばれる。肺は心臓に隣接する器官で、声の道具である。この肺臓のない生き物は話せず、声を発することができないという点において、これが声の道具であることは明白である。肺はまた呼吸器官でもあり、「静脈様動脈」を通じて空気を送ることによって「心臓」を冷やす役割ももつ。空気は「気管」を通過して肺に入ってくる。気管は多くの軟骨、膜、筋から成り、鼻や口から空気を取り込み、また同様に鼻や口から、「心臓」からの蒸散気を吐き出す。

動物的機能を司る上の「部分」のうち、主たる器官は「脳」である。脳は軟らかく、髄から成る白い物質で、種子と精気の最も純粋な部分から発生し、何重もの膜に被われて頭蓋骨の中にある。天の下で何よりも崇高な器官で、魂の宿る館、その座であり、智慧、記憶、判断、理性の住処、人間が最も神に近いのはこの部分においてである。それ故自然は脳を硬い骨でできた頭蓋と二枚の膜で被った。二枚の膜の一枚は「硬膜」、他の一枚は「軟膜」と呼ばれる。「硬膜」は頭蓋骨のすぐ下であって、脳を内包し保護している「軟膜」の外側にある。硬膜を取り除くと、「軟膜」が薄い膜として見える。それは脳を直接被うものであるが、ただ被っているだけではなく、脳の内部に入り込んでもある。「脳」そのものは「前頭」と「後頭」二つの部分に分けられる。「前頭」は「後頭」より大きく、その点において後者は「小脳」と呼ばれる。また「前頭」はある種の空

洞によって分けられる多くの窪みがあり、それは精気の容れ物である。精気は心臓から動脈によってここに運び込まれ、より神秘的な性質のものへと浄化され魂の行為を為す。この脳室には「右」、「中」、「左」の三つがある。「右室」と「左室」はその位置に対応するもので動物精気を生み出す。それらが損傷すると感覚も運動も制止されてしまう。さらにこれら左右脳室は共通感覚を司る場所と考えられる。「中脳室」は左右両方の脳室と繋がる空洞で、二つの通路がある。一つは「下垂体」に繋がり、もう一つは四つめの部分に繋がる。この四つめの部分に「想像」や「思考」が位置すると考える者もいる。前頭の三つの脳室はかく使われる。後頭部の四つめの室は「小脳」と脊椎の髄、すなわち脳のなかで最も軟らかいものと最も硬いものの両方に繋がっている部分で、他の脳室から動物精気を受け取り、背骨の髄に運ぶ。またそれは記憶が存在する場所であると言われる。

第5項

魂とその機能について。

アリストテレスによれば、魂は「エンテレケイア (ἐντελέχεια)」, 「可能態として生命を有する有機体の完成態にして第一現実態」と定義され、これにほとんどの哲学者達が同意する。しかし魂の「本質」、「主体」、「座」、「特質」や、それらに付随する機能に関して当然ながら多くの疑義が湧き起こる。(人間の魂であれ獣の魂であれ) その本質およびそれについての個別の知識に関して、それらを明らかにすることは全ての他のことに比して最も難しい。アリストテレスその人も、キケロ、ピコ・デッラ・ミランドラ、トレド、その他現代の哲学者もそう認めている。「魂によって我々は全てのことを理解できる。だが、魂が何であるかは理解できない」。それ故、「魂」は一つで三つの主要な機能に分けられると考える者もいれば、三つの「魂」が別々にあると考える者もいる。この問題については最近、ピッコロミーニやザバレッラが大いに議論してきた。パラケルススなら、今まで認められている三機能に「霊的魂」を加えて四つの「魂」を考えるであろう。このパラケルススの意見については、カンパネッラがその著『事物の感覚について』において、殺人者を目にして死体が血を流す等、同様の多くの事例によって、証明し明らかにすべく議論を尽くしている。どんな生き物であれ魂は一つであり、器官の違いによってのみ異なると言う者もいる。すなわち獣は人間と同様に理性をもっているが、なんらかの器官が欠陥をもつ故に同じだけの基準に達しないのである。あるいはまた、皆が皆同じように理性をもち、またそれが全て同じ部位に存するかどうかについて疑問を呈する者もいて、特にザバレッラにおいて、広く議論されている。魂の通常の種類は「植物的」、「感覚的」、「理性的」の主たる機能に分けるものであり、それらの機能は、それぞれ生き物を「植物的」植物、「感覚的」動物、「理性的」人間の三種に分類する。これら主たる三機能がいかに区別され、関連しあうかは人間の資質では理解できないと思われるとタウレルス、メランヒトン、フランコヴィッツ等々は考えている。下位の魂は単独で存在可能だが、上位の魂は下位の魂なくしては存在し得ない。故に感覚的魂は植物的魂

を内包し、理性的魂は植物的、感覺的魂を内包する、すなわち（アリストテレスが言うように）「四角形が三角形を内包するごとく」これら両魂は理性的魂に含まれるのである。

「植物的機能」は三つの機能のうちの最初のもので、「生命体の実体に関する行為で、身体が育まれ、大きくなり、自らに似たものを生み出すもの」と定義づけられる。この定義においては、「育成」、「増大」、「生殖」の三つの異なる作用が明示される。第一は「育成」で、その目的は、食物、飲み物など滋養を与えることで、感覺的生き物においてはそれを司る器官は肝臓であり、植物においては根または導管である。その仕事は滋養分を身体の実質に変え育てることで、生来の熱を用いて行う。この滋養供給の作用はそれに属する四つの下位機能や働きをもつ、すなわち「吸引」、「保持」、「消化」、「排出」である。「吸引」は供給機能で、磁石が鉄を引きつけるように、あるいはまたランプが油を吸い込むように、食物を胃の中に引き込むのだが、この吸引力は植物においてはことのほか必要である。というのも植物は、動物が口から取り込むように根から水分を吸収し、動物が胃に送り込むように導管に送り込むからである。「保持」は、食物を消化液と混ぜ合わせる時がくるまで、胃に吸収して溜めておくこと。というのも食物が素通りしてしまうと身体に滋養分を与えられないからである。「消化」は生来の熱により行われる。松明の炎が油、蜜蝋、獣脂を消費するように、この作用は滋養のあるものを変え、消化する。「不消化」はこれの反対で、生来の熱がないときに起こる。「消化」には異なった三種があり、それは「熟成」、「調合」、「焙煎」である。「熟成」は木の果実に特に見られるもので、種子が再び蒔くのに適したとき果実が熟したと言う。「未熟成」はその反対で、生来の熱をかき立てることを何もしないか、火に薪をくべすぎてかき消してしまうように弱めてしまうことで、大食漢、美食家、怠惰な者達が陥りがちなものである。「調合」は胃の中で食物を煮ることである。前述の生来の熱により、いわば食物を鍋で茹でるような状態にするのである。腐敗はこの逆である。「焙煎」は熱で体内の水分を調合することで、その逆は「生焼け」である。これら「消化」の個々の三作用とは別に調合の四段階がある。口の中で噛む「咀嚼」、口で咀嚼した食物の胃の中での「乳糜化」、三番目は肝臓で「乳糜」を血液に変える「血液化」、最後はどの部位でも見られる「同化」である。「排出」は「滋養供給」の一機能であり、それにより余分な排出物、食物や飲み物の残滓を腸や膀胱、毛穴から排泄する。つまり排便、嘔吐、唾棄、発汗、尿や髪、爪等々といった形によってである。

この「滋養供給機能」が身体に滋養を与えることに資するように、「増大機能」（「植物的機能」の二番目の作用や働き）は、長さ、幅、厚さの全ての次元において、身体を量的に大きくし、然るべき比率で完全な形になるまで成長させることに資する。身体には、衰退していくときがあるのと同じように成長する時期がある。これはかの詩人が言うように、極めて明らかなことである。

人の日はみな定められていて、
生命の時は誰にも短かく、取り戻すべくもない。

「植物的機能」の最後のものは「生殖」である。種子を使って自分に似たものをもう一つ作り出す機能で、「種」の永遠保存に供するためである。この機能には下位機能として三つが考えられる。第一は滋養を種子などに変える等々。

「植物的機能」に必然的に伴うもの、すなわちその作用は生命であり、その喪失は死である。生命保持には、乾と湿、これらの主要な質は欠くべからざるものであるが、生来の熱が最も重要なものである。この熱は植物においても、感じ取りにくいものとはいえ、成長、結実の際に現れる。あらゆる生物体においては、生命は自ら生命を消尽させずに維持するため、根源的水分を有していなければならない。その保持には我々の地域、国、気温、そしてこれらの本性的でない六つの事項の良き使用と悪しき使用が大いに影響を与える。この生来の熱や湿気が衰えると、同様に我々の生命それ自体も衰えていく。そして何らかの暴力的な不測の事態によって前もって妨げられたり、我々自身の過ちによって中断されたりしなかったとしても、生命は最後には老齡ゆえに干からび、材質がなくなって、死によって消滅せしめられる。ランプがそれを維持する油がなくなると消えるのと同様である。

第6項 感覺的魂について。

次に扱うべきは「感覺的機能」で、この機能はその尊厳において植物的機能よりはるかに上である。そのことは、感覺的機能が植物的力をも内包して有している故に、獣が植物より上におかれることにおいて見られる。それは「生命体の行為であり、これによりそのものが生き、感覺や食欲、判断力をもち、呼吸、移動を行う」と定義される。その対象物は概して可感的、可知的資質のものであるが、感覺がそれに反応するからである。全体を統べる器官は脳、そこから基本的に感覺の作用が引き出される。「感覺的魂」は「知覚」と「運動」の二つの部分に分けられる。「知覚」力によって我々はその存在しようとなかろうと、知覚され得るものの外形を知覚し、蠟が封印の刻印を保つように維持する。「運動」力により身体は外的には一つの場所から別の場所へと運ばれ、また内的には精気と鼓動によって動かされる。「知覚機能」は、さらに「内的」、「外的」に二分される。「外的機能」は、「触覚」、「聴覚」、「視覚」、「嗅覚」、「味覚」の五感であり、それにスカリジェの言う「快感刺激」という第六の感覺を加えても良い。あるいはルルによれば、第六番目の外的感覺として「言語」の感覺が加わる。「内的機能」には、「共通感覺」、「想像」、「記憶」の三つがある。五つの外的感覺は、その対象が外部の事物のみであり、そこに存在するものである。つまり手近になれば眼にはその色が見えず、耳にはその音が聞こえないのである。このうち、「聴覚」、「視覚」、「嗅覚」の三つは便利なもので、「触覚」、「味覚」の二つは、これがなければ生きていけない必須のものである。さらに、「感覺的」力は「能動的」である場合も「受動的」である場合もある。視覚が能動的である場合、眼は色を見る。「受動的」であるときは、

対象物によって傷つけられるときで、すなわちかの公理「強すぎる光は感覚を壊す」に従えば、太陽光線によって眼が傷つくような場合、また対象が好ましくないとき、つまり耳に対して不快な音、鼻に対して刺すような臭いのあるときも同様である。五感のうち、「視覚」は最も大切なもので、最上のものであるとされる。その対象物の性質故、直ちにその全体像を見て取り、それによってあらゆるものを知り、識別する、それゆえ視覚は我々にとって最も有益なものである。「視覚」には「対象物」、「器官」、「媒体」の三つが不可欠である。「対象物」は基本的に「可視的な」ものであり、色とかすべての光り輝くもののように見られ得るものである。「媒体」は光による空気の発光、通常「透過」と呼ばれるものである。暗闇の中では我々は見ることができないからである。「器官」は眼、主たる部分は瞳孔である。視神経により、二つの像を一つにし、それを共通感覚に運ぶ。器官と対象物との間には然るべき距離が必要で、近すぎても遠すぎても良くない。優れた哲学者達によって議論された多くの問題はこの感覚に関連することである。例えば、視覚は内にもたらされるのか、外に送り出されるのか云々、すなわち可視的な形態を受け取ることによるのか、はたまた可視的なものを送り出すことによるのかについて、プラトン、プルトルコス、マクロビウス、ラクタンティウス、そのほかの人々が議論している。さらにこれは透視法の主題であり、アラブ人アル・ハウゼン、ウイテロ、ロジャー・ベイコン、バティスタ・ポルタ、ガイド・ウバルド、ダグイニオン等がそれについて包括的な著作を著した。

「聴覚」は最も優れた外的感覚で、「それにより我々は知識を学んだり得たりする」。その対象物は音、耳で知覚できるものであり、その「媒体」は空気、「器官」は耳である。空気の衝突である音に対しては三つのものが必要である。まず音を打ち出すもの、たとえば演奏家の手である。次に打たれるもの、たとえば鐘やリュートの絃で、羊毛や海綿ではなく、硬くて抵抗のある音を出すものでなくてはならない。そして「媒体」たる空気、これは「内側の」ものと「外側の」ものとに分かれる。外側での空気は硬いものによって打たれたり、衝突されたりして、さらに次の空気を打ち、最後には身体自体に備わっている内側の空気にまで到達する。その空気の部分は、小さい皮膚に包まれてドラムのような形を成し、精妙な器官となっている。これがドラム・スティックのような小さな道具で打たれると、そこで出た音を、聴覚の役割を担った二本の神経で「共通感覚」に伝え、そこで音が判断される。音には様々な種類があり、大いなる喜びもあるが、それらについてはボエティウスや他の音楽家を参照すべし。

「嗅覚」は「吸気を吸引する鼻腔によって認識する外的感覚」で、最も弱い感覚である。器官は鼻、または鼻のすぐ上の小さな二つの肉の空洞である。「媒体」は人間にとっては空気、魚にとっては水。「対象物」、「臭い」は気化した混合体から生じる。その臭いが質なのか、煙霧、湯気、また蒸気なのかについても、それらがどう違うのか、それらがどのようにして生じるのかについても、今ここで議論するつもりはない。アウルス・ゲリウスが視覚と聴覚とを教育に関わる感覚と言うように、この感覚は健康を左右する器官で、良い匂いを選び取ること同様、悪い臭いを避け

ることで、身体に変化や影響を与えることがしばしばであり、それは「食事」そのものによる影響と同じである。

「味覚」は必須の感覚で「舌と口蓋、そして水様性の分泌液、薄い唾液で、あらゆる風味を知覚する」。その「器官」は味覚神経と「舌」である。「媒体」は水様性の分泌液、「対象物」は「味」、風味で、水様性で、味わわれるものの混合体から生じる。八種の味、苦味、甘味、酸味、辛味等を区別できる者もいるが、(瘡の場合のように)病気の者は器官が損なわれており、味を見分けることができるとは限らない。

「触覚」は感覚の最後のもので、最も卑しいものではあるが、他の感覚同様、大いに必要なものであり、大いに楽しみをもたらすものでもある。この感覚は人においては鋭敏で、身体中に張り巡らされた神経で触知できる質のもの全てを知覚する。「器官」は「神経」、「対象物」はまず熱、乾、湿、冷といった第一の主要性質、ついでそれに続く硬、軟、濃、淡などの性質である。これら五感、その器官、対象物、媒体に関して、多くの愉しい問題が哲学者達によって提出されているが、それについては紙面節約のため述べることは控える。

第7項 内的感覚について。

「内的感覚」とは頭蓋の中に位置するためにそのように呼ばれ、「共通感覚」、「想像力」、「記憶」の三つである。その対象物は現前しているものだけでなく、「来るべきもの」であれ、「過去のもの」であれ、「不在のもの」であれ、感覚により眼前にあるかのごとく、知覚可能な像を認識する。共通感覚というのはその他の感覚の判定者、もしくは調停者であり、それによって我々は対象のあらゆる違いを区別することができる。というのも、自身の目によっては自分が見ているということを、あるいは耳によっては自分が聞いているということを知ることはできず、これは音や色を判断する共通感覚によるのである。諸感覚は、判断されるべき像をもたらす器官に過ぎず、諸感覚の対象物はすべて共通感覚のもの、諸感覚の仕事もすべて共通感覚のものである。脳の最前部がその器官、もしくは座である。

「想像力」つまり像を作る能力、人によっては「判断力」や「思考力」と呼んでいるもの(このことは、しばしば沈思黙考することで確かめられるとフェルネルは述べているが)は、内的感覚の一つであり、共通感覚によって認識された、現前もしくは不在のものの像をさらによく検討し、それらを保存し、精神に呼び出したり自ら新たな像を生み出したりする。睡眠時にはこの能力は自由になり、病人によく見られるように、たびたび奇妙で途方も無く不合理な形象を懐胎する。その「器官」は脳の中央部であり、その「対象」は「共通感覚」によって伝えられるすべて

の像で、それらを比較することで別の無数の像を創りだす。この能力は「憂鬱症」の人において最も強力で、特に共通感覚や記憶によって呈示された何か恐ろしい対象によって刺激された時には、多くの不気味で怪物じみたものを生じさせることで、害をなすこともある。詩人や画家においては、個々の作り話、奇怪な彫像や画像に見られるように、またオウィディウスの眠りの館や、アプレイウスのプシュケーの宮殿の例のように、「想像力」は強力に働く。人においてはこれは理性に従い支配されるか、少なくともそうなるべきであるが、獣においてはこれより上位の能力は無く、想像力が野獣の理となるのである。

「記憶」は、感覚が持ち込んだ全ての像を蓄え、良き「登記官」として記録し、それらが「想像力」や「理性」に呼び出された時に即座に使えるように用意しておく。その対象は「想像力」と同じであり、その座、「器官」は脳の後部である。

これらの感覚の属性は「睡眠」と「覚醒」で、これは感覚をもつ全ての被造物に共通である。(スカリジェが定義しているように)「眠りとは肉体と魂の保持のための、外的感覚および共通感覚の休息あるいは束縛の状態である」。というのも、共通感覚が休息するとき、外的感覚も休むからである。想像力と、その指揮官である理性だけが自由に活動するが、これは体液、食事、行動、対象等々によって変化する、「自然的」、「神的」、「悪魔的」といった様々な種類の現実離れした夢に見られる通りである。これらの夢については、アルテミドロス、カルダーノ、サンブクスが各々の解釈を添えて、大部な著作をものしている。感覚のこの拘束は精気の阻害によって生じるが、これは精気が通るべき道筋が塞ぎ止められることによって、つまり、胃から生じた蒸気が、精気の運ばれるべき通路である神経を満たし、精気の停滞が生じることによるのである。この蒸気が消えると通路が開かれ、精気が通常の働きを始める。つまり「覚醒とは、全身に広がった精気が引き起こす、諸感覚の行為と運動である」。

第8項 運動能力について。

「運動能力」とは「感覚的魂」のもうひとつの能力であり、「肉体におけるあらゆる内的、外的な動物的运动」を引き起こす。これは「欲求能力」と「場所の移動能力」という二つの能力に分けられる。「欲求能力」は、ある人達によれば三種あり、まず、石が落下するといった性向や、「保持」や「排泄」といった、感覚によらない「植物的」な行為を指す「自然的」なものがある。これには、食物と飲料に対する欲求、餓えと渇きがある。「感覚的」欲求は人と獣に共通である。第三の知的なものが「意志的」欲求であり、これは人においては他の二つに命令し、それらを抑制する。あるいは少なくともそうあるべきなのだが、大抵は他の二つに囚われ、圧倒され、人は色欲その他様々な煩惱に自由に振舞わせ、獣の如く感覚に引きずられる。この意志的欲求によ

て魂は導かれ、感覚が認める良いものを追い求め、感覚が悪とみなすものを避ける。その対象は善か悪かであり、一方を受け入れ、他方を拒絶する。「全てのものは自らの善を求める」という金言（少なくとも善に見えるものを、と言うべきかもしれないが）のとおりである。この能力は感覚と分ち難い。というのも、感覚があるところ、同様に快樂と苦痛があるからである。その「器官」は「共通感覚」と同じであり、二つの能力あるいは傾向に分けられる。「欲望的」と「憤慨的」、もしくは（ある翻訳によれば）「貪欲的」と「憤撃的」つまり排撃的である。「欲望的」とは、快く愉快なものを常に求め、不味くて粗く不快なものを忌み嫌うものであり、「憤慨的」とは、「怒りと憤りでそれを避けるようなものである」。すべての情念や心の乱れはこの二つの源泉から生じ、ストア派はこれを軽視するが、我々はこれを生来のもので抗し難いと考える。良き情念とは、同じ性質の対象によって引き起こされるが、それが眼前にあれば喜びをもたらす、その喜びが心臓を拡張し、健康を保持し、もしなければ希望、愛、欲望、肉欲を生じる。「悪しき」情念は「単純なもの」か「混合されたもの」である。「単純なもの」とは、何らかの悪しき対象が眼前にある場合には、心臓を収縮させ、魂を衰弱させ、体の機能を阻害して良好な体調を崩し、憂鬱症を引き起こし、多くの場合死を招くこともある悲しみのような感情であり、その対象が未来のものであれば恐怖となる。この悲しみと恐怖から、混合された情念や怒りの激情が生じるが、それらは復讐への欲望、根深い怒りを伴った嫌悪、愛する者を傷つける輩によってかき立てられる憤り、そして他人の不幸を喜び、その繁栄を忌々しく思うときの喜びと憎悪の「混合情念（ἐπιχαίρεκακία）」などである。高慢、自己愛、対抗心、嫉妬、恥辱等々もあるが、これについては別の箇所論じたい。

「場所の移動能力」は、必然的に前述の能力に続くものである。というのも、もし体を場所から場所へ動かすことによって何かを追う、あるいは避ける能力をもっていなければ、欲求したり忌み嫌ったりすることは無駄になるであろう。故に、この能力により、我々は肉体、あるいはその一部を場所的に動かし、ある場所から他の場所へと移動するのである。これをよりよく実行するためには三つのものが必須である。すなわち、動かすもの、動かす手段、動かされるものである。動かすものとは作用因か目的である。目的とは、犬においては兎を捕らえることであるように、欲求される、あるいは避けられる対象である。人間における作用因とは、対象の善悪を判断する「理性」、あるいはその配下の「想像力」、動物においては「想像力」のみであり、これが「欲求」を動かす。「欲求」はこの移動能力を動かし、これが驚嘆すべき自然の連鎖と精気の仲介によって、動かす手段である器官に命令を下す。この器官は体全体に分布した神経、筋肉、腱から成り、精気の望むように縮んだり伸びたりする。精気は筋肉、あるいはその中の神経を動かし、腱を引っ張り、その結果、関節を動かして意図した場所へ行くのである。動かされるものとは身体、あるいは動くのに適した何らかの器官である。身体の動きは、進む、走る、跳ぶ、踊る、座る等々、様々であり、「位置」の範疇に帰せられる。虫は這い、鳥は飛び、魚は泳ぐ。また体の各部の動きも多様であり、その主なものは「呼吸」で、以下のように行われる。外気が「気管」を通して引き

込まれ、「横隔膜」の伸介によって肺に送られる。肺はまずふいごのように拡張して空気を取り入れ、次いでそれを心臓を冷却する為に送り出す。そこで熱くなった空気を再び運び、さらに新鮮な空気を取り込む。「脈」の動きも類似したものであるが、これについては多くの作家が十全な書物を著しているのに、何も言うことはない。

第9項

理性的魂について。

ここまでの項では魂の下位の能力について解剖を行ってきたが、「理性的なもの」、ある者に言わせれば「心地よいがあやふやな主題」が残っている。これを同様に手短かに論じよう。その本質と起源について、多くの誤った見解がある。それはゼノンが考えるように火なのか、アリストクセヌスの言うように調和なのか、クセノクラテスの数なのか、器官を有するのか有さないのか、脳、心臓、血液のいずれに座を占めるのか、死すべきものか不死なのか等。どのようにして肉体に入るのかについては、メランヒトン『魂について』1巻、テルトゥリアヌス、ラクタンティウス『神の御業について』19章、サン＝ヴィクトルのフーゴー『霊と魂について』、ヴァンサン・ド・ボーヴェ『自然の鑑』23巻2章及び11章に見られるように「靈魂伝移」によると考える者がいる。ヒポクラテス、アヴィケンナ、その他多くの最近の作家達は、人は肉体と魂をもった人を産む、あるいは蠟燭から蠟燭が作られるように、種子から産み出されると述べている。さもなければ、人は人の半分しか産まないことになり、質料と形相を備えた子孫を産む獣より劣っていることになってしまうだろうと彼らは主張する。さらに、伝移によらなければ、魂の三つの機能は同時に注入されなければならないが、これは彼らが言うように、かなり馬鹿げた考えである。というのも、獣においては下位の二つの機能は生み出されるのであって、人においてだけうまく分離できるものでもないからである。ガレノスは魂を「混合体」と考え、トリスメギストゥス、ムサエウス、オルフェウス、ホメロス、ピンダロス、パエシデス・シリウス、エピクテートスは、カルデア人、エジプト人とともに、魂は不死であると主張しているが、これはプリテン島の古のドルイド教徒も同様である。ピュタゴラス派は「輪廻」や「再生」、すなわちまずレテの水を飲んだ後、魂がある肉体から別の肉体へ、つまりその人の生前の傾向や、その人の持つ特性に従って、狼、熊、犬、豚へと移ると主張する。

我々は野獣の体に我が家を見出し
牛と一体となるであろう。

ルキアノスの雄鶏は最初は船長のエウフォルブスであった。

記憶の限りでは、この私はトロイ戦争の頃、

パントウスの息子、エウフォルブスであり、

馬、人間、海綿になった。背教者ユリアヌスは、アレクサンドロスの魂が我が身に下ってきていると信じていた。『ティマイオス』と『パイドン』におけるプラトンは（私が理解する限りでは）次のような意見とさほど異なっていない。すなわち、魂はまず神から生じ、あらゆる知識をもっていたが、肉体に閉じ込められ、それらを忘れ、新たに学ぶことになる。これを「想起」と呼ぶ。また、魂は罰として肉体の中へ送られ、そこから『国家』10巻の「籤による魂の割り当て」という愉快な作り話に見られるように、人もしくは獣に入り、一万年後に再び元の肉体に戻る。

何年ものあいだ、千の変転を重ねたのち、
再び、人の生の始まりに戻る。

魂の不死を否定する者もいる。つい先頃ではパドヴァのポンポナッツィがアリストテレスから結論し、また大プリニウス2巻7章及び7巻55章、セネカ『ルキリウスへの書簡』7巻の書簡55、キケロ『トゥスクルム荘対談集』におけるディケアルクス、アラトゥス、ヒポクラテス、ガレノス、ルクレティウス1巻にあるように

（さらに、精神が肉体とともに生まれ、ともに成長し
ともに老いるのを我々を見る）

さらにアヴェロエス、その他数え切れないほどの当代の著作家達もそうである。「魂の不死性というこの問題は、特に最近のイタリア人の中で様々に、また驚嘆すべきほどに論難され議論されている」とヤーコプ・コラーは『魂の不死について』1章で述べている。また、教皇達もこれに疑いを持った。ある者の記録によると、かの「快樂主義者」の教皇レオ十世は、この問題の賛否を自身の面前で論じさせ、ついに不敬で罰当たりな「裁定者」として、コルネリウス・ガルス次の詩句で締め括った。

かつて無であったものは、無で終わる。

アウグスティヌスが引用するところによると、ゼノンとストア派は、魂は、肉体が完全に腐敗し、「第一原質」に戻るまでは存在すると考えた。しかしその後は煙と消えるのである。その一方で、肉体が消尽しつつある間は、魂は広く彷徨い、「遠くの出来事を数多く報告し」、(クラゾメナイのヘルモティムスが断言したように) 幾多の幻影を見、なにやら分からない物事を経験する。

血の気の無い影の如く、魂は肉も骨も無く彷徨う。

また、魂の不死を認めつつ、その一方で肉体を離れた後の魂について、プラトンの「エリジウムの野」であるとか、「トルコ人の天国」であるとか、多くの途方もない作り話を語っている者もいる。彼らは良き人の魂を神格化し、悪しき魂は「悪魔となる」と考えた（とアウグスティヌスは述べている）が、その他同様の多くの馬鹿げた信念とともにアウグスティヌスに反駁されている。ヒエロニムス、アウグスティヌス、他の教父達は、「魂」は不死であり、無から創られ、懐胎から六ヶ月後に子宮の中の「胎児」に注入されるとしている。これは「靈魂伝移」により体内に入り、共に死に、無に帰する動物の魂とは異なるのである。この点について疑いをもったアッティクスにプラトンの『パイドン』を読ませたキケロに倣って、不信心な連中には、こうした神学的な論考や聖書そのものを読むように勧めたい。また哲学的根拠や証明を望むなら、この主題についてのニフォヤニコロ・カステッラーニの論考、ジャン＝フランチェスコ・ピコの『魂について』の註釈補遺、トゥールーズのグレゴワール、ステウコ、またソト、カノ、トマス・アクィナス、ペレス、ダンディーニ、コラー、さらにザンキの入念な論考、魂の不死性を証明するための、トレドの六十の理由やレイスの二十二の論証等を読まれない。カンパネッラ『事物の感覚について』はこの論議を広範に行い、スコラ学者アルベルティーニも同様、ヤコポ・ナッキアンティ『全集』2巻はこの問題を四つの疑問において扱っている。またアントニオ・ブルーノ、アントニオ・デイ・パリアリッチ、マラン・メルセンヌ、その他多くの著作もある。この「理性的魂」は、アウグスティヌスが自らを動かす霊的実体と呼び、哲学者達によって「自然的、人間的、有機的、肉体の最初の実体的行為であり、これにより人は生き、認識し、理解し、あらゆることを自由に選択して行う」と定義される。この定義から我々は、「理性的魂」は他の二つの魂の能力を含みその役割を果たすと結論できる。他の二つは理性的魂に含まれ、三つの能力は一つの「魂」をなす。それはあらゆる部位に行き渡るがそれ自体の器官をもたず、非物質的なものであって様々な部位の器官を用いてそれにより働く。また、主要な二つの部分に分けられるが、本質においては、役割においてのみ異なる。すなわち、「理性」の「把握」能力である「理解能力」と、「理性」の「運動」能力である「意志」であり、その他全ての理性の能力はこの二つに従属し、還元できるのである。

第10項

理解能力について。

「理解能力とは魂の能力であり、それによって我々は、普遍も個物も認識し、知り、記憶し、判断する。ある種の生得観念をもち、諸技芸の始めであり、省察的行為であり、これにより自らの行いを精査し判断する」。この定義（自らの行う全てを何の道具や器官の助けもなしに理解し判断するという、その主な働きは別にして）から、人と獣のあいだに三つの違いが生じる。第一に、感覚は「個物」のみを理解するが、理解能力は「普遍」を理解する。第二に、感覚は内的観念をもたない。第三に、動物は自らを省みない。蜂は確かに巧みで精緻な技をなし、さらに他の

多くの被造物も同様であるが、ひと仕事終えた時、それらを判断することはできない。「理解能力」の対象は神、存在、全自然、何であれ理解され得るものであり、これを理解能力は段階的に把握する。最初に「理解能力」を動かす対象は、何らかの感覚し得るものであり、そののち推論によって精神が物質的実体を見出し、そこから精神的実体に到る。その行為は(ある者によると)「把握」、「構成」、「分割」、「推論」、「論断」、「記憶」(これらを「考案」に含める者もいるが)と「判断」である。理解能力の一般的な分類は、「能動的」か「受動的」か、「思索的」か「実践的」か、「習慣」の状態か「行為」の状態か、「単純」か「複合」か、である。「能動的なもの」とは「知的能力」と呼ばれ、教え手なしに自ら考案し新たに学ぶときの、考案の「明敏さ、精妙さ、鋭さ」であり、想像力から可知的な像を抽出し、これを受動的な理解能力に手渡す。「というのも最初に感覚で捉えられないものは理解能力の中にはないからである」。想像力が感覚から受け取ったものを、この「能動的な理解能力」が真か偽かを判断し、次いで「受動的な理解能力」に保持しておくように任せるのである。「能動的なもの」は教師、「受動的なもの」は生徒であり、その役割は、最初はあらゆる形相や概念を受け入れる白紙として、自らに任されたものを保持し、さらに判断することである。ところでこうした「概念」には二重の側面があり、それは「行為」的なものと「所持・習慣」的なものである。行為とは、我々が事物の概念を捉え認識する手段であり、「所持・習慣」とは、必要なときに用いることができる持続的な光や概念である。「感覚」、「経験」、「直知」、「信仰」、「疑念」、「誤謬」、「憶測」、「学問」という八種の「理解能力」を数える者もあり、これに「技芸」、「賢慮」、「知恵」を加えることができる。さらに、「良知」、「理性の指図」、「良心」を加えることもでき、合わせて十四種類があることになる。このうちのあるものは、最後に述べた三つのように「生得のもの」であり、またあるものは、教育、学習、実践によって得られる。プラトンはこれらすべてを生得のものと考え、アリストテレスは知的に所持されているものとして五つだけを数えている。「諸原理の直知」と、「諸結論に到る学知」という、「思索的なもの」が二つ、その目的が実践することである「賢慮」と、制作することである「技芸」という、「実践的なもの」が二つ、そして何であれ全ての概念と所持されているものの使用と実践を含む「知恵」である。アリストテレスのこの分類は(正しく考察するならば)、先に述べたものと同一である。というのも、三つが生得的なものであり、五つが獲得されたものであり、残りは不適切、不完全で、厳密に検討すれば排除されるからである。ここでの主題が許せば、これらすべてについてさらに敷衍して述べるべきところだが、今後の論説により必要なものとして、そのうち三つについてだけ触れておきたい。

「良知」、すなわち良心のより純粋な部分とは、内的な所持・習慣であり、「神の法と自然の法」についての知識を所持し、善悪を弁えること」を意味する。これは(我々の聖職者達が主張するように)「意志」ではなく「理解能力」に属し、実践的「三段論法」における「大前提」となる。「理性の指図」は我々に善悪を為すように勧告するものであり、この「三段論法」の「小前提」にあたる。「良心」とは、自身の行為を是とするか非とするかによって善悪を証するものであり、

「三段論法」の結論である。カルタゴ人の捕虜となり、再び戻るか相応の身代金を払うかという条件付きでローマへ遣わされたローマ人レグルスのよく知られた例で言えば、まず「良知」が次のように問題を提示する。自らの言葉、誓い、約束は、たとえ敵に対してであっても神聖に守られるべきであり、これは自然の法に則ったものである。「己の欲せざるところ人に施すことなかれ」。「理性の指図」はこれを彼個人に適用し、次のように勧告する。レグルスよ、お前は他人がお前に対して偽誓し、約束を破ることを望まないであろう。そして「良心」が結論する。故にレグルスよ、お前は約束を履行するのが賢明であり、誓いを守るべきである。これについては「宗教的憂鬱症」の章でさらに述べよう。

第11項 意志について。

「意志」とは「理性的魂」のもうひとつの能力であり、「理解能力によって先に判断され理解されたものを欲したり避けたりする」。もし善であればこれを認め、悪であれば避ける。従ってその対象は善か悪かである。アリストテレスはこれを「理性的欲求」と呼んだが、それは「感覺的欲求」において我々が感覚に支配され、「欲求」によって善悪へと導かれるように、この「理性的欲求」では「理性」によって動かされるからである。また、「感覺的欲求」は善か悪かの個別の対象をもっているが、この「理性的欲求」は普遍的で非物質的な対象をもつ。前者は快適で心地良いものだけを、後者は誠実さを重んじる。さらに両者は、自由という点でも異なる。「感覺的欲求」は、対象を見てそれが相応の善であれば欲せざるを得ず、悪であれば避けざるを得ない。しかし「理性的欲求」は、本質的には自由であり、「今や最初の完全さから墮落し、曇り、転落しているとはいえ、その働きのいくらかでは依然として自由であり」、望むがままに進み、歩き、動き、するかしないか、盗むか盗まないかを選ぶ。さもなければ、法、熟慮、訓戒、忠言、戒律、応報、約束、脅しと罰などは空しいものとなり、神は罪の造り手ということになるだろう。しかし、靈的な事柄において我々は善を求めず、(悔い改めて聖靈に導かれない限り)我々は生まれ持った情欲に唆されて悪へと傾く。我々の能力は「混乱 (ἀταξία)」を来たし、「我々の全意志は神とその法から離れる」。これは飲み食い、肉欲といった、そこへ向かって我々が気質と過度の欲求によって一直線に導かれるような、自然的な事柄に限らない。

我々は立ち止まって抵抗できるほど
十分に強くはなく、

抵抗できず、我々の欲望は元来が悪であり、感情の座である心臓は邪悪であり、我々の意志を捕えて無理強いする。同様に、自発的事柄においても、我々は神と善性から離れる。我々は生まれつき悪であり、無知によってさらに悪化し、企み、教育、習慣によって多くの悪習を身につけ、

それらが我々を支配し暴政を振るうがままにさせ、そして悪魔が邪悪な唆しをもって待ち構え、我々の墮落した意志を何らかのたちの悪い行為へと誘い、破滅へと急き立てる。これは、我々の「意志」が、神聖な戒めと霊の善良な運動によって支配され、再び平衡を取り戻さない限りそうなるのである。我々が自墮落な行為の真っ只中にあるときに、霊は我々を抑え、妨げ、制する。そのようにダヴィデは、サウルに対して有利な状況にあったときに自らを正したのである。一方では復讐と悪意の二つが激しく難じたが、他方で誠実、信心、神への恐れが彼を引き留めたのだった。

「意志」の行為は、「したい」か「したくない」か、望むか望まぬかであって、この二つの言葉が全てを含んでおり、その導かれる方向によって善にも悪にもなる。これらのうちの幾つかは、意志によって自由に行われるが、ただストア派はこれを完全に否定し、全ての物事は不可避的に「運命」によって行われると主張し、我々に抗いようのない決定的な必然性を負わせる。しかし、人間の観点から見れば我々の意志は自由であり、あらゆる事象は偶有的と言えるだろう。とはいえ、決定的な神慮からみれば全ての事象は不可避で必然的であるのだが。その他いくつかの「意志」の行為は、より下位の能力によって行われるが、これは目を開けたり、あちらこちらへと移動したり、本に触れなかったり、誉めたり貶めたりといった、「感覚的運動欲求」として、意志に従うものである。しかしこの「欲求」は、我々においては往々にして反抗的であり、正気と自制の境界内には取まらない。それは（先ほど述べたように）かつて理性と協調し、それらの間には優れた一致と調和があったのだが、今やその絆は解体され、両者は仲違いし、「理性」は「情念」に圧倒される。

御者が馬に引きずられ、馬は手綱を氣にとめない、

それは荒れ狂った馬が戦車を引きずって走り去り、抑えがきかないようにである。何が善であるか知っていながら、それをすることが出来ないことも珍しくはない。メディアが語っているように

何か見知らぬ新たな力が意志に逆らって私を引き寄せる
欲望が一方へと、理性が他方へと促す。

情欲があることを、理性が別のことを説き、新たな葛藤が生まれる。

いくら嫌でも私は自分が嫌うものであることをやめられない。

我々は逆らえない、パエドラが乳母に「あなたの言うことは正しい。けれども狂気が私を駆り立

てて、より悪しき道を辿らせるのです」と認めたように。彼女は真実を言い当てている。正しいことを認めながらも、向こう見ずな情念と怒りのために、その逆の事を行ってしまふのである。そのようにダヴィデは、自らの行為の汚らわしさ、姦通がいかに忌むべき醜くおぞましい罪であるかを知りながら、それでも殺人を犯し、他人の妻を奪い、理性と宗教に逆らつて自らの欲求に従ふことになった。

魂の「自然的」、「植物的」能力は「意志」によっては全く制御できない。というのも、「誰も1 キュビットを自分の身長に付け加えられはしない」からである。その他の能力は制御できるかもしれないが、実際にはされていない。そしてそこから、あらゆる無鉄砲な情念、精神の激しい懊惱が生じる。またしばしば、悪癖、悪習、致命的な病も生じるが、これは我々が野獣の如く、「欲求」に身をまかせ、性癖に流されるからである。主要な「慣習」は「美德」と「悪徳」の二つに分けられるが、その個別の定義、叙述、相違、その種に属するもの等は「倫理学」で広く扱われ、実際、「道徳哲学」の主題となるものである。

第3節

第1項

憂鬱症の定義、名称とその種類。

ここまで簡単ながら今後の議論の下地として、人間の身体と魂との解剖的知識を概観してきたが、これで私の意図する対象について論を進めても多くの人には支障とならないだろう。まずは多くの曖昧な点を指摘した後、この「憂鬱症」とは何なのか明快に定義し、その名称と種類とを示していきたい。「名称」は、質料によって与えられ、病はその質料因から名づけられるのであり、ブルエレが述べているように、「^{メラノコリア}憂鬱症 (Μελαγχολία)」は「^{メライナ・コレ}黒胆汁 (Μέλαινα χολή)」に由来する。この名称がその原因を指すのか、その結果を指すものなのか、つまり病名なのか、その徴候を指す名なのかについては、ドナート・アルトマーレとサルヴィアーニとに任せるとして、私は論じないことにする。この病気に関しては、いくつも異なる記述や表記、定義があり、フラカストロがその知性論2巻において「憂鬱症」と呼ぶ人々は、「まさにその劣化した黒胆汁が増えることで悪影響を受けた人々で、彼らはそれゆえに狂気に陥り、選択、意志、その他ははっきりと理解能力に関連しているほとんど、あるいはすべての点で耄碌する」。ガレノスを典拠とするメラネリウスとルルスとアエティウスは、これを「人間を獣へと墮落させる悪質でやっかいな病気」と記述している。またガレノスによると、「頭部の真ん中の小室の機能障害や汚染」で、悪影響を受ける部分からその定義を行っているが、この点に関してはエルコレ・サツソーニアも意見が一致していて、その著書の1巻16章で「主要機能の欠陥」と呼んでいる。フックス1巻23章、アルナルドゥス『診療概略』1巻18章、グアイネリオなども同様で、パウルスは「黒胆汁が原因で」と追記している。ハリアッバスは単純に「精神の攪乱」と呼んでいる。アレテウスは「魂の永劫

の苦痛で、ひとつのことに固着せず、高熱を伴うことがない」としているが、この定義はメリクリアーレの「頭部の感染について」1巻10章で非難されている。しかしエリアーノ・モンタルトは『憂鬱症論』の「頭部の病について」1章でアレテウスの定義を十分優れたものとして擁護している。より一般的な定義は「発熱を伴わない毫碌の類で、明白な理由もなく、恐怖や悲しみを伴うもの」というものであり、デュ・ローラン4章、ル・ボワ1巻43章、ドナート・アルトマーレ『医術論』7章、ジャキーニ『ラーゼスのアルマンソー宛第9書簡「各部位の病気について」註解』15章、デ・ヴァレス『演習』17、フックス『綱領』3巻1節11章なども同意見である。しかしこの多数によって支持される共通の定義に対しても、エルコレ・サツソーニアなら異議を唱えるだろうし、ダーフィット・クルシウスはその著『ヘルメスとヒポクラテスによる病の劇場』2巻6章で不十分な定義、すなわち「それが何であるのかではなく、それが何でないかを示す」だけで、想像力と脳という明らかな区別を無視していると非難している。この辺りの異論はともかく、各論に移って種類を論じたい。この病気の最上群は「毫碌」あるいはアレテウスによれば「精神の苦痛」で、さらにエルコレ・サツソーニアは痙攣と中風、あるいは外的感覚と動きに関する病気とから区別するために「主要部分に関する」とつけ加え、また愚かさや狂気（モンタルトによると「魂の苦痛」とは別物）と区別するために「欠如した」という表現が追記される。愚かさや狂気においては、諸機能は欠如するのではなく、むしろ破壊されるからである。また精神炎や感染性熱病における憂鬱状態とからも区別するために「高熱を伴うことなく」と但し書きがつく。「狂気」とは「恐怖」と「悲しみ」という表現で区別され、最後に普通の感情としての「恐怖」や「悲しみ」と区別するために「理由もなく」という表現が挿入されている。よってデュ・ローランが解釈しているように、「憂鬱症の人誰もがもっている、想像力や理性といった精神の主要機関が損なわれてしまう毫碌状態」と呼ぶのが適切なものかもしれない。このとき体液は大部分が冷たく乾いているのだから、腐敗とは正反対なのであり、よって熱は伴わない。「恐怖」と「悲しみ」とは多くの憂鬱症における真の特徴であり、切り離すことのできない徴候であるが、エルコレ・サツソーニアが『憂鬱症の研究』2章で適切に例外を示しているように、すべての人に当てはまるわけではない。というのも、ほとんど笑っているような憂鬱症患者の場合、この病気は非常に快適なものであるし、以下に示すような患者の場合は、大胆で、あらゆる恐怖や悲しみとは無縁であるからだ。

第2項

感染箇所。感染。感染者。

この病気に罹る主要箇所を巡っては作家達の間で見解がわかれていて、「脳」とする者、「心臓」とする者、その他の場所をあげる者がいる。多くの者は脳がその箇所だということで一致しているが、この病気に罹るとある種の毫碌状態となり、「一致」によるにしろ「本質」によるにしろ、同質箇所が感染を受けるのだから脳が感染を受けるに違いないからである。ただし脳室や、

その閉塞によるものではないと考えられる。もしそうだとしたら、卒中か癲癇になってしまう。だから、そうではなくデュ・ローランが的確に述べているように、その本質において脳中の体液がバランスを崩して冷たく乾いた状態になって生じるのであろう。つまり狂人や狂いかけた人間に見られるように脳が腐り、冷たくなりすぎたり、乾燥しすぎたり、あるいは熱くなりすぎたりするわけである。この点はヒポクラテスも認めているし、ガレノスやアラブ人、さらに最近の著作家の多くも同意している。(臨床例としてヒルデスハイムが引用している)マルコ・デリ・オッティとそこに引用されているその他五人の作家達は、恐怖や悲しみは感情であり、心臓に所在するものであるから、という理由で脳所在説に反論している。しかし、この反論に対してはモンタルトが十分な回答を与えている。彼は、心臓が感染を受けることは否定しないが、それは主要箇所ではないと言う。「心臓」は確かに感染を受けるし、(ガレノスを典拠にメラネリウスが示しているように)その近接性ゆえ、「横隔膜」などその他多くの箇所も感染を受ける。こういった箇所は同調する、つまり自然の法則にしたがって似たような感覚をもっているのである。しかしこの病気は先行する「想像力」に「欲求」が伴って引き起こされ、そこには精気が従い、こういった主要箇所に左右される。つまり「理性」の座である「脳」が第一に影響を受けるのであり、そのあと、「感情」の座である「心臓」が影響を被るというわけである。カポディワッカとメルクリアーレとはこの問題に大量の頁を割き、脳の内部を感染箇所とし、そこから心臓や、その他重要でない箇所へ伝えられ、それらが同調するものだから、大いに問題を引き起こすのであり、支障の度合いは特に一致による場合が大きく、しばしば支障をきたす胃(アラブ人の言葉ではミラク)、全身、肝臓、脾臓などが原因の場合も大変で、さらにその箇所は「幽門」,「腸間膜血管」等々にまでいたる、と両者共に結論している。というのもファン・ルイス・ヴィヴェスが『人間寓話』で見事に言明しているように、我々の体は時計のようなもので、部品が一つでも欠けると、他の箇所も全部混乱してしまい、構造すべてが支障をきたすのである。人間はこのように驚嘆すべき技と調和とによって構成されており、その均整も、同様にすぐれたものなのである。

この病気が引き起こす「作用」についても、作用されるのが「想像力」なのか、「理性」なのか、それともその両者なのか、という多くの疑念が生じてくる。エルコレ・サツォーニアはガレノスとアエティウスとアルトマーレを典拠に、影響を受けるのは「想像力」だけだとしているが、これに関してはブルエレも同意見である。モンタルトは『憂鬱症』2章で多くの例をひきながら、こういった考えを主張する人々に反論している。たとえば、自分が貝だと思っている男、どんなに説得しても自分が呪われていると信じ込んでいる、修道女や絶望状態の修道僧を引き合いに出し、このような誤りを正すことができなかったのだから、彼らは「想像力」だけでなく「理性」もおかしくなっていたと主張する。こういった人達はしばしば自殺したり、不条理で馬鹿げたことを信じ込んだりする。「理性」がまともならば、どうしてこういった過ちを見出し、解決し、説得しないのだろうか。したがって、アヴィケンナはどちらも影響を受けると主張し、この見解は多くのアラブ人に支持されている。またこの立場はアレテウスやド・ゴルドン、グアイネリオ

等々によっても支持されている。論争をまとめてみよう。「想像力」が傷つけられ、作用を受けるという点では誰もが一致している。その他の点では、パドゥアの医師、アルベルト・ボットーニと共にこう結論したい。まず「想像力が影響を受け、病気が慢性化したり、多少なりとも持続すると、そのあと理性が感染する」と。ただ、時にはエルコレ・サッソーニアが付記しているように、「想像力の欠陥によって信仰、意見、推理、推論、こういったものすべてが付帯的に損なわれてしまうことがある」。

感染箇所に加えて、ここで感染する人についても触れようと思うが、この件については後でより適切に論じる箇所があるので、今は名前を挙げるだけにとどめておく。生誕時に「月」か「土星」か「水星」の悪影響を受けた者。寒すぎたり暑すぎたりする気候で暮らしている者。「憂鬱症」の両親から生まれた者。六つの非本性的な事項について過ちを犯している者。頭部が小さい、心臓が熱い、脳が湿っている、肝臓が熱い、胃が冷たい、長い間病気に罹っている者、黒味がかっているか、極めて血紅色の表情をした者。性質上孤独な者、偉大な学者、瞑想しすぎる者、怠け者、行動とは無縁の生活を送る者、こうした人達が憂鬱症にもっとも罹りやすい。性別では両性とも罹るが、男性の方が罹りやすい。しかし女性が感染した場合、より激しく暴れまわり、痛ましいほど厄介である。一年の季節の中では「秋」がもっとも憂鬱である。年齢だと、老齢で、ここで生じる自然憂鬱症はほとんど避けられない出来事であるが、人為的憂鬱症は中年の方が発症頻度は高い。この年齢に関しては四十歳とするものもいるが、ガリオポントゥスは三十歳とし、ユベールは、この後天的憂鬱症は若者と老人には見られないとしている。しかしダニエル・ゼンネルトは一般的経験からするとあらゆる性質のあらゆる者が罹るとし、「憂鬱症はあらゆる場所で、どんな肉体でも、それがどんな状態でも猛威をふるう」と述べている。アエティウスとアレティウスも、「不満気な人、感情的な人、悲惨な人、顔色が黒ずんだ人や黒い人だけでなく、楽しげな人、快活な人、嘲笑する人、紅潮した人」もその数に入れている。ラーゼス曰く、「概してすぐれた知力を持つ人、気前のいい精神が、とりわけこの病気にかかりやすい」のだが、私にはいかなる顔色の人、いかなる状態の人、どちらの性、いかなる年齢も排除することはできない。ただし阿呆と「ストア派」は例外で、シネシオスによると、彼らはいかなる種類の感情にも害されることはないのだが、要するに彼らは「アナクレオンの蝉」のごとく、「血の流れていない非情漢で、事実上、神と同じなのだ」。エラスムスも阿呆をこの憂鬱症のカタログから排除しているが、それは彼らの多くが湿った脳と軽い心臓の持ち主だからである。「阿呆達には野心や嫉妬、恥辱や恐怖という感情がなく、良心に悩まされることもなければ、心配事やつれることもない。つまり我々の全人生が被りやすい感情と、彼らは無縁なのである」。

第3項

黒胆汁の質料について。

黒胆汁の質料については、カルダーノの『反論集』、デ・ヴァレスの『論争集』、あるいはダ・モンテ、プロスペロー・カラーニ、カポディワッカ、ブライト、フィチーノのようにこの問題を論じるのに論考全体をあて、あるいは、その大部分をこの問題に割いている作家達を読めばわかるように、アヴィケンナとガレノスとの間に大きな論点がある。ジャキーニが考えるように「ガレノスにしても、またいかなる古代の著作家達にしても、この体液が何であるのか、これがどこから生じてくるのか、また体内でどのように作り出されるのかについては十分には論じてこなかった」が、現代の作家達も見解が一致していない。ダ・モンテはその『医療診断集』で黒胆汁が「物質的」か「非物質的」であると主張しており、アルコラーニも同意見である。「物質的なもの」とは先に言及した四体液の一つであり、よって生来のものである。付随的である「非物質的なもの」は、後天的で、余分なもので、生来のものでなく、人工的なものであり、エルコレ・サッソーニアなら、精気においてのみ存在し、「熱、冷、乾、湿の不均衡」から生じ、「その不均衡は物質を伴うことなく脳とその機能とを変質させる」と言うだろう。パラケルススはこの四体液と四気質という分類を完全に退け、嘲笑っているが、ガレノス主義者達は概ねこの考えを支持し、ダ・モンテの見解に賛成している。

この物質的黒胆汁には「単純なもの」と「混合体」とがあり、「量的」にも「質的」にも害をなし、またどこにあるか、すなわち脳、脾臓、腸間膜静脈、心臓、子宮、胃といった所在地によっても変化し、さらに生来の体液同士の混ざり具合、あるいは四つの焦げた非生来の体液が、さまざまに調整されたり、混ぜ合わされたりすることによっても異なる。冷たく乾いた生来の黒胆汁が体内で増え、「体がうまく対処できる分量をこえると、調子が狂い、病気になる」とベネデット・ヴィットーリは述べている。非生来の黒胆汁についても、黄胆汁が焦げたものであれ、血液が焦げたものであれ、悪化すると、同様の状態を引き起こし、モンタルトが論じるように、体液が焦げることによって生じるのであるなら、大部分は熱く、乾いている。この黒胆汁という物質が、すべての四体液から生じるものであるかどうか、またその色と性質とについては見解が分かっている。ガレノスは粘液を除く三つの体液からのみ作り出されると言い、デ・ヴァレスとマナルデイとがこの見解の正しさを堅固に主張、フックスとモンタルト、ダ・モンテも同様である。彼ら曰く、一体、白い体液が黒くなることなどあるだろうか。しかしエルコレ・サッソーニア（『憂鬱症の研究』8章）とカルダーノとはこれに反対で（めったに起こらないが、黒胆汁は粘液からも作られる）、この見解はグアイネリオとデュ・ローラン1章、メラニヒトン『魂について』の体液に関する章で支持されている。デュ・ローランはこれを愚鈍で、澱んだ、汚らしい黒胆汁と呼び、実際、それを目にしたと述べているが、この件についてはヴェッカーも同様である。焦げた黒胆汁からある種の憂鬱症が生じ、焦げた黄胆汁からはまた別の種類の憂鬱症が生じるが、これ

がもっとも狂暴である。また焦げた粘液から生じる憂鬱症は鈍く、焦げた血液から生じるものが、一番ましである。これらの中には、その混ざり具合、強められたり弱められたりすることで、冷たく乾いたものもあれば、熱く乾いたものもある。実際、ロドリゴ・ダ・フォンセカが『診断集』12巻1で結論しているように、イコルなど漿液状の物質が濃くなって粘液となり、粘液が劣化して黄胆汁となり、黄胆汁が焦げることで、「緑青色黒胆汁」となるのであるが、それはちょうど純なるワインを腐敗させたり、清純な酒精を蒸発させることで酢ができ、すっぱく鋭い味になるのと同様である。そしてこの体液はその鋭さゆえ、先に述べたように、不眠や、厄介な思考や夢を引き起こしたりするのである。またこの体液が冷たい場合は、ベネデット・ヴィットーリが言うように、「毫碌の原因となり、比較的温厚な症状を生じるが、熱い場合、人は無鉄砲で、狂乱し、あるいはそういった傾向を見せる」。脳が熱い場合は、動物精気が熱くなり、激しい行動を伴う狂気が生じ、冷たい場合、白痴や愚鈍を生じる（カポディワッカ）。「この混合液の色は、熱い場合も冷たい場合も、その混合の度合いに応じて変化し、黒くなる時もあるときもあれば、そうならないときもある」（アルトマーレ）。同じことをメラネリウスはガレノスから証明し、ヒポクラテスも『憂鬱症』（これが彼の本だとして）で、燃える石炭を例に出し、「熱いと輝き、冷たいと黒く見えるが、この体液も同様だ」と言っている。このように黒胆汁の質料がさまざまだと、その症状もさまざまである。体内にあって腐敗していなければ、どす黒い黄疸を生じ、腐敗していれば、四日熱を生じる。皮膚にまで出てくると癩病、各部位にいたると壊血病などさまざまな病気を生じる。心を侵す場合も、その混ざり具合によって、さまざまな種類の狂気と毫碌とを生じるが、これについては各々の箇所述べることにする。

第4項

憂鬱症の種類について。

その質料がさまざまに混乱していれば、その種類もさまざまに混乱していることは必定である。古今の作家達の多くもその語り口が混乱し、たとえばヴァン・ヒュールネ、グアイネリオ、ド・ゴルドン、サルースティオ・サルヴィアーニ、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ、サヴォナローラなどは、憂鬱症と狂気とを混同し、憂鬱症以外の狂気は存在しない、（既に述べたように）ただ程度が異なるだけだとしている。古代の作家ル فس・エベシウスや、コンスタンティヌス・アフリカーヌス、アレタイウス、アウレリアーヌス、アイギナのパウロのように、憂鬱症を二種類にわける者もいれば、『テトラビプロス』におけるアエティウス、アヴィケンナ（3巻1部4論考18章）、アルコラーニ（ラーゼス宛第9書簡16章）、ダ・モンテ（『医療診断集』1部）のように、憂鬱症の種類は多岐にわたり、その数は決められないとする者もいる。「生来の黒胆汁が焦げることで一種類、血液が焦げることで、また別の、黄胆汁が焦げることで、一番目のとはまた違う三種類目の憂鬱症が生じるとする説もあるが、憂鬱症の種類に関してはいくつも見解があり、十人十色といっても過言ではない」。エルコレ・サッソーニアは、「物質的憂鬱症と非物質

的憂鬱症」という二種類にわけ、「後者は精気のみから、前者は体液と精気とから生じる」としている。サヴォナローラ（『法文集』11部6論考1章「頭部の病気について」）は憂鬱症の種類を無数にあると主張する側で、アラブ人によって「ミラキアリス」と呼ばれる、ミラクから生じるもの、「ストマカリス」、すなわち胃から生じるもの、肝臓、心臓、子宮、痔核から生じるもの、「初期的憂鬱症」、「末期的憂鬱症」などの種類を挙げている。メランヒトンはサヴォナローラを支持し、体液が焦げたり混ぜ合わさったりするのがさまざまなものだから、その種類もさまざまだとしている。しかしこういった作家達が種類として語っているものは、思うに、症状として理解されるべきものであり、アルコールにもそう解釈している。無数の種類とは、つまり、無数の症状なのである。この意味で、ジャン・ド・ゴリスがその医学的定義において認めているように、種類は無数かもしれないが、その原因となる座によって三種類にまとめることができる。すなわち「頭部」、「身体部」、「下肋部」の三種類である。この三種類にわけける分類法を支持しているのは、『憂鬱症』（彼の著作であるかどうか疑うむきもあるが）におけるヒポクラテス、ガレノス（3巻「患部について」6章）、アレクサンドロス（1巻16章）、ラーゼス（全集1巻9論考1書16章）、アヴィケンナ、そして現代の著作家達の多くである。トマス・エラストゥスは二種類にわけ、一つを「頭部憂鬱症」で永続的とし、もう一つは断続的で発作的に生じるものだとしているが、彼は後者をさらに二つの種類にわけているので、結局は三種類と同じである。またロドリゴ・デ・カストロ（『婦人の病気について』2巻3章）とルイス・メルカード（『婦人疾患について』2巻4章）のように四、五種類とする者もいて、メルカードは修道女や未亡人、あるいは老婆の憂鬱症を他とは異なる特別なものとして扱っている。また狂信者や法悦者と悪魔憑きを別立てにして、恋愛憂鬱症と狼憑きを第一の憂鬱症に加える者もいる。しかし、もっとも受け入れられている分類法は三種類にわけけるものである。第一種は脳の損傷からのみ生じるもので「頭部憂鬱症」と呼ばれる。第二種は体全体が共鳴し生じるもので、全気質が憂鬱症となる。第三種は、腸、肝臓、脾臓、あるいは「メセンテリウム」と呼ばれる膜から生じるもので、「下肋部憂鬱症」、あるいは「ガス性憂鬱症」と名づけられており、デュ・ローランはこれを生じる場所からさらに三つにわけ、「肝臓憂鬱症」、「脾臓憂鬱症」、「腸間膜憂鬱症」としている。アヴィケンナが「イリシ」と呼ぶ「恋愛憂鬱症」、「ククブテ」と呼ぶ「狼憑き」は、普通、頭部憂鬱症に含まれているが、ゲラルドゥス・デ・ソロが「アモレオス」と呼び、多くの人が「騎士の憂鬱症」と呼ぶもの、ロドリゴ・デ・カストロとメルカードとが「処女と未亡人のもの」と主張する「宗教的憂鬱症」の類、これらに合わせて、さまざまな種類の恋愛憂鬱症については、第三部で、別立てとして論じていく。先に述べた三種類については、さしあたっての主題であり、これらについてはその原因、症状、治療法について、総合的に、そして別個に解剖し、取り扱っていくつもりである。この病気に何らかの形で侵された者が、自分自身でその病気を調べ、治療を施すことができるようにするためである。

あらかじめ告白しておくが、これら三種類を互いに識別し、それぞれの原因、症状、治療法を

示すのは難しい。というのも、これらには類似点が多く、しばしば混同されるので、極めて正確を期す医者でさえほとんど見分けることができず、また他の病気とも併発するので、経験をつんだすぐれた医師でも過ちをおかしてしまうほどだからである。ダ・モンテは診察26でこの憂鬱症と過食症とを併発した患者を挙げ、診察28では眩暈との併発患者、ジュリオ・チェーザレ・キョディーニは結石症、通風、黄疸との併発患者、トリンカヴェッラは瘡、黄疸、過食症などとの併発患者を挙げていて、当代きっての偉大な医師とされたパオロ・レゴリーニもこのケースを診察し、症状の混同に当惑してどの種類の憂鬱症か決めることができなかつた。イタリアの有名な医者であるトリンカヴェッラ、ファロピオ、フランカザーニの三人もある患者を同時に診て、三者三様ばらばらの見解を示したという。またこの他にもトリンカヴェッラは、ある若者のもとへ派遣され、その憂鬱症についてどう思うかと問われた際、確かに憂鬱症ではあるが、どの種類の憂鬱症なのかはわからないと率直に述べた。さらに彼の診察17には、ある修道士の憂鬱症について見解の不一致が同様に記載されている。他の人なら器官と体液の変調に帰するような症状をエルコレ・サツソーニアは、既述したように、すべて精気の不均衡、つまり非物質的原因のためとしているのである。また、この病気は他の病気とも区別が付きにくいこともある。ライナー・ゾレナダーは『診察集』3部5で、ブランデ医師とともに患者の病気は下胸部憂鬱症であるとしたが、これに対し、マトルドゥス医師は喘息以外にはありえないと言っている。ゾレナダーとグァリノーニとは数人とともに最近、憂鬱症のクレーヴェ公爵のもとに派遣されたが、どの種類の憂鬱症であるか決めかね、二人の間でも見解がわかれていた。チェーザレ・キョディーニが診察44でポーランドのある伯爵について「患者は頭部憂鬱症と同時に気質全体から生じる憂鬱症を患っていた」と述べているように、これらの種類は混同されやすい。また三種類すべてを同時に併発する例や、連続して発症する例を付け加えることもできるが、煩雑になるのでやめておく。憂鬱症の種類については、共和制、君主制、貴族政治、民主政治の純粹形態について述べている政治思想家達の多くと同様に結論しておこう。こういった政治形態は理論形態でよく知られているが、(ポリュピオスが言うように)スパルタや古代ローマで、また現代ドイツなど多くの場合においても、実際には調整されたり、普通は混じりあっているものだ。結局のところ、患者の身体では大抵さまざまな種類が混じり合っているのだから、医者達が本の中で個別の種として論じているものはあまり大切ではない。したがって、こういった曖昧さ、症状と原因とが多様でかつ混乱するほどに混じり合っている状態では、個々の種類を別々に取り扱うこと、またこれほど多くの偶発的症狀や狂態が生じる中で一つ一つの症状を確定し、きちんと識別することはなんとも難しい。実際、二人として徹頭徹尾同じような症状をみせることはめったにないのだから。確かに難しい、しかし、それでも私はこの混乱のまっただ中に覚悟を決めて入っていき、最良の作家達が示したくれた手がかりと糸とに導かれ、疑義と誤謬の迷宮から抜け出したいと思っているのだ。そこでまず原因について論を進めたい。

*ゴシック表記は原文がラテン語であることを示す。
解剖用語については、現代と異なる部位を指すことがある。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)*(6 Vols.). Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile)(The English Experience)*. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

既訳

「第1部第1章第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007 所収

(2008年10月1日受理)

(おかむら まきこ 文学部教授)

(おかだ のりゆき 神戸大学非常勤講師)

(かわしま のぶひろ 大阪学院大学准教授)